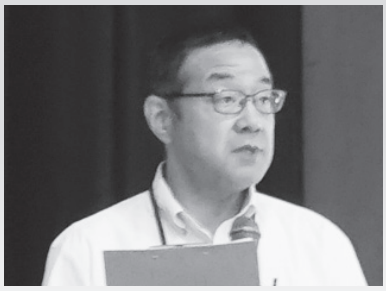
社会

社会的な見方・考え方を働かせ、深い学びにいたる授業づくり

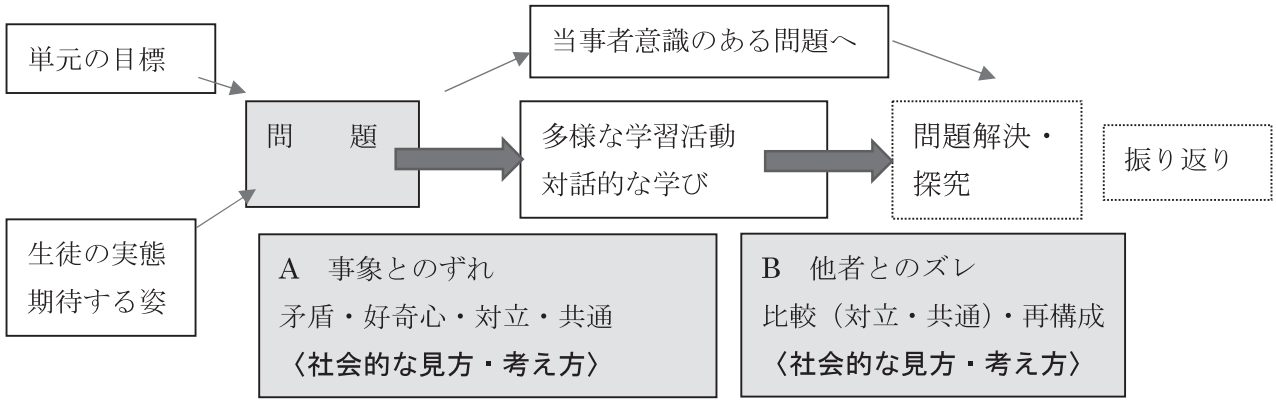
深い学びの実現のために「見方・考え方」を働かせる単元構成を工夫し、考察、説明、議論などの多様な学習活動を構想していきます。ここでは、多様な学習活動を工夫し、「見方・考え方」を働かせて「資質・能力」を育む授業について考えます。



県中教研　社会科部　全県部長
魚沼市立広神中学校
校長　小森　一秀

深い学びにいたる学び合いと、「見方・考え方」を働かせ多様な活動を展開する単元構成の工夫

これまでの、学習を振り返ると一時間の授業で学習問題（課題）の追究や解決を目指すことは難しく、深い学びにならない傾向があります。生徒の実態を踏まえ、学習内容を構造化し、生徒の問題意識の変化を想定しながら単元を構想し学習をデザインしていく必要があります。その過程で「見方・考え方」をどの場面でどのように働かせるかを考え、多様な活動を組織し、深い学びの実現を目指しています。また、資料の提示や教師の問いを工夫し、これまでの学習内容や経験と事象とのズレに気づき、当事者意識をもって課題の解決に向けて主体的な学びにつなげます。そして、課題解決や探究に向かう場面での学び合いや、振り返りやまとめの場面で単元の学びを明確にする単元を構想していきます。



※Class 第４号　p16　の図を参考に改良

資質・能力を一体的に育む学習形態の工夫

「見方・考え方」は思考力・判断力の育成だけでなく、資質･能力全体に関わるもので、「深い学び」の実現に重要なものです。社会的事象について資料や事実を様々な「見方・考え方」を働かせてつなげて解釈することで「知識・技能」の習得につながったり、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて思考をまとめる中で、よりよい社会の実現に向けて主体的に課題解決しようとする態度が育まれたりします。このように思考力・判断力と一体的に資質・能力を育むことができます。また、自己の考えを広げ、多様な考えを理解し、深い学びにつなげるために、子ども同士、教師や教材と対話を行い、課題を探究したり、解決したりする活動では学び合いが不可欠です。

「見方･考え方」を働かせた学び合いにより、次の様な効果が期待できます。

○見方・考え方を使った説明をしたり、聞いたりすることで、多様な視点から社会的事象の特色や意味を多角的に考え、より明確にできる。

○多様な考えを交流させ、知識を相互に関連付けて認識の深まりを明らかにすることでより社会事象の関係性を明確にできる。

学び合いを通して、認識の深まりを顕在化させ、課題に対するまとめや提言へつなげていきます。学び合いの場面では、個人、小集団、ペアなど様々な形態での活動を通して深い学びの実現を目指していきます。

○考えを深める多様な学習活動。（各地区のポイントより）

深い学びは、これだと決まったものがあるわけでなく、各地区の研究会では、「見方・考え方」を働かせて、以下の様に多様な学習活動を工夫して目指す深い学びの姿に迫っていきます。

○学習課題が成立する過程で、「見方・考え方」を働かせる「問い」や教材提示を工夫し、社会事象を既習事項、経験と関連付けさせる。（問い・教材提示の工夫）

○多面的・多角的な考察や選択・判断する場を設けて、知識や認識の広がりや深まりを明確にする。
（議論・対話・検討）

○思考ツールやICTを活用して、意見や思考を整理して深い学びにつながる学習活動を組織する。

社会　重点目標

自ら考え自ら学び、確かな学力を育てる社会科の学習指導に努める。

○ 生徒の学ぶ意欲を高めるために、主体的な学習を促す魅力ある「教材開発」や「単元構成の工夫」を行う。

○ 学び合い深め合う学習を実現するために、適切な課題を設けて行う学習の充実を図り、小集団学習や話し合い活動を取り入れた「学習過程の改善」を行う。

○ 資料を選択し活用して、自分の考えを記述・発表する力を育てる。

社会 ＜上越地区／上越市中教研＞

「民主政治と日本の政治」

研究推進責任者
上越市立直江津東中学校
長野　朋水

教科・領域担当者
上越市立清里中学校
新國　雄介

研究主題：社会的事象に関心をもち、
自分事として学習課題に取り組む生徒の育成
～自分の考えをもち、対話によって
学びを深める授業を通して～

開 催 日：10月17日（火）
会 場 校：上越市立清里中学校
公　　開：１学級
授 業 者：３年　新國　雄介
指 導 者：上越市立頸城中学校　校長　小池　　修 様

こんな深い学びの姿を目指します

「単元を貫く学習課題（問い）」を設定し、すべての生徒が見通しをもって学ぶことができるようにします。単元全体の構成において、個人で思考した課題を集団で対話することで練り上げ、最後に個人に戻って振り返ります。単元の最後に、「単元を貫く学習課題（問い）」について、それぞれが自分なりの答えを導き出します。生活に根ざした身近な事象を取り上げることで、深い学びの姿を実現します。

深い学びにいたるポイント

ポイント１　「単元を貫く学習課題（問い）」の設定

すべての生徒が、社会的事象に関心をもち、自分事として学習課題に取り組むことができるように、生活に根ざした、身近で切実性を感じることができる単元構成とします。そのため、最初に「単元を貫く学習課題（問い）」を設定します。

ポイント２　単元全体の構成、各時間において 個人で思考 → 集団で対話・練り上げ → 個人に戻って振り返り

自分事として学習課題に取り組み、深い学びの姿を実現するためには、まずは、自分の考えをもつことが重要です。一人一人の考えを集団で対話し、練り上げます。それぞれの考えに変容が見られ、個人に戻って振り返ることで、再考を促します。

ポイント３　単元の最後に「単元を貫く学習課題（問い）」の振り返り

単元の最後に「単元を貫く学習課題（問い）」について、それぞれが自分なりの答えを導き出します。単元全体を通して、自分の考えをもち、対話によって学びを深めることを通して、深い学びの姿を実現します。

単元（題材）の様子

ポイント１

単元の開始時に「単元を貫く学習課題（問い）」を確認し、問いに対する自分なりの答えをシートに記入します。

単元を貫く学習課題
上越市清里区の未来につながる政策を提案しよう

ポイント２

単元全体の構成、各時間において、個人で思考し、集団で対話し、練り上げます。最後には、個人に戻って振り返ります。

先に総合的な学習の時間で学習した上越市や清里区の現状を踏まえて、清里区の魅力や課題を整理します。個人で調べ、考えたことを班で共有します。その際、授業者は政策を考えるにあたっての視点（置かれた立場）を各班に示します。

班を一つの政党と見立てて、それぞれの視点で魅力ある清里区にするための政策を考えます。班（政党）内で話合いを通じて政策をまとめ、その後、学級全体に発表します。

高齢者、子ども、女性、農業従事者、観光業を含む商業従事者にとって、どういう街が望ましいか、現在の魅力を生かしてさらに磨きをかけるためにはどうしたらよいか、対話を通じて政策を練り上げます。

研究会

本時の学習課題	魅力ある清里区にするための政策を選ぼう

本時では、前時で各班（政党）が考えた５つの政策について、以下の４つの観点に基づき、吟味します。

（1）必要性	（2）実現性（効率）
（3）公益性（公正）	（4）発展性

まず、個人で政策を吟味します。５つの政策の中から現実性や有効性があると考える政策を選択し、効果が期待できそうな順に並べてダイヤモンドランキング表を作成します。

さらに、それを持ち寄って班内で共有します。その際、根拠を重視して話し合い、班内でのダイヤモンドランキング表を作成します。そして、班としての考えを学級全体の場で発表します。

単元の終末を前に、一人一人の生徒が試行錯誤を重ね、自分事として考えた政策です。研究会では、それぞれの取組の姿勢や発表内容にご注目ください。

ポイント３

単元の最後に「単元を貫く学習課題（問い）」を振り返ります。

単元の最後に「単元を貫く学習課題（問い）」について、それぞれが自分なりの答えを導き出し、上越市清里区の未来につながる政策をまとめます。まとめた政策は、上越市清里区の関係団体に提案していきます。

社会 ＜中越地区／三条市中教研＞

「地方自治と住民参加」

研究推進責任者
三条市立大崎学園
廣瀬　貴久

教科・領域担当者
三条市立第一中学校
溝口　祐介

研究主題：社会的な見方・考え方を働かせ、
課題を追究し続ける生徒の育成
～関わり合い、共に学ぶ授業を通して～
開 催 日：11月28日（火）
会 場 校：三条市立第一中学校
公　　開：１学級
授 業 者：３年　溝口　祐介
指 導 者：見附市教育委員会学校教育課課長補佐　関　　拓也 様
三条市教育委員会学校教育課統括指導主事
松原　康之 様

・こんな深い学びの姿を目指します・

当事者意識をもって学習問題に向き合うことで、生徒は主体的に社会的事象を見つめ考えていくようになります。思考ツールを活用するなど、視点の明確化と考えの可視化を図り、多面的･多角的な考察を行います。小グループと全体での交流を通して、自己の考えが強化・深化・変容したり、根拠をもって納得解・最適解を導いたりする姿を目指します。

・深い学びにいたるポイント・

ポイント１　深い学びの姿を具体的に想定して単元をデザインする。

生徒がもつ問題意識と深い学びの姿（発言、記述、見方・考え方、取組方等）を具体的に想定して単元計画をつくります。生徒が深い学びにいたる過程が見えてきます。ここで想定した姿は評価規準にもなります。教師は想定した深い学びの姿に導く手立てを工夫するとともに、単元を通して指導の修正を図ります。

ポイント２　当事者意識をともなう学習問題を設定する。

自分に引きつけて考えられる学習問題を設定することで、生徒は自分事として考え、追究意欲が持続します。単元の中で問題解決と問題発見を繰り返すことで深い学びにつながっていきます。

ポイント３　社会的な見方・考え方を働かせた考察・検討場面を設定する。

思考ツールなどを活用し、視点を明確にもたせて、考えの可視化・共有化を図ります。考察・検討場面で生徒が事象の関連性をとらえたり、価値や意味、意義を考えたり、解釈したりして納得解や最適解をもてるようにします。

単元（題材）の様子

ポイント１

本単元では「地域社会の発展に向け、地域が抱える課題に対して、市民としての自覚をもって解消方法を考えることができる」というねらいを達成した生徒の姿を右のように設定しました。

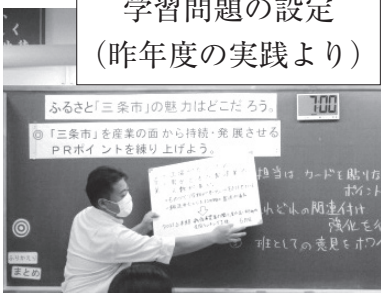
観点	知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう人間性
達成した子どもの姿(B)	・地域の政治について調べ、様々な政治参加の取り組みとその意義について理解している。	・地域の課題を具体的に検討し、課題解決の方策を考えることができる。	・市民として、地域社会の課題を見つけ、その解決方法について考えを広げようとしている。
達成した子どもの姿(A)	・より良い地域作りに向けた取り組みを理解し、財源の確保や住民参加の重要性について理解している。	・実現可能かを多面的、多角的に考察し、地域課題の解消に向けた現実的な提案を考えることができる。	・市民として、地域社会の課題の解決を視野に、主体的に社会に関わろうとしている。

ポイント２

生徒が自分に引きつけて考えやすい「ふるさと納税」をきっかけに、三条市の職員を招いて三条市政についての話を聞く中で、公共サービスへのニーズや市の税収の現状、ふるさと納税の実態を明らかにしていきます。

様々な立場の人の思いに触れながら、より良い三条市のあり方をどのように描くか、具体的にどのような提案や参画ができるのかを考えることができるように学習問題を設定します。

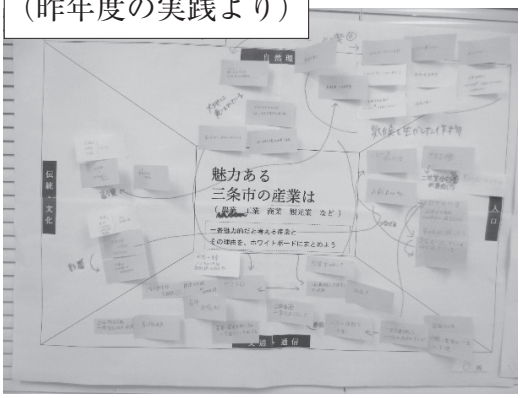
学習問題の設定
（昨年度の実践より）



ポイント２ **ポイント３**

三条市の職員を招いた講座では、三条市の施策と課題、財源にふれてもらい、「ふるさと納税」に対する市の姿勢や、考えについて理解を深めます。財源確保が進む自治体、財源流出が起きている自治体間の課題を踏まえ、学習問題を設定し、より良い三条市の実現に向けた市政の優先度について考えます。ダイヤモンドランキングなどの思考ツール、ジャムボードなどのＩＣＴを活用しながら、視覚化・共有化を図り、意見の拡散と整理を行います。

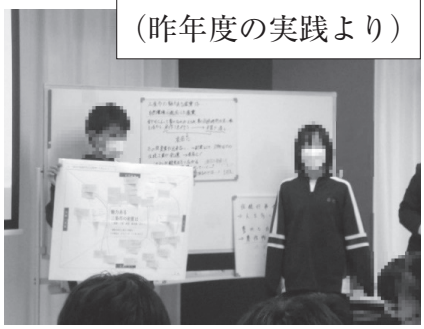
コアマトリクス
（昨年度の実践より）



研究会 **ポイント２** **ポイント３**

これまで学習してきた三条市の魅力、課題、財源をふまえて、生徒が願うこれからの三条市政のあり方について、「効率」と「公正」の視点と優先度や必要性の観点（社会的な見方・考え方）からの見直しを図らせます。生徒が三条市の魅力を理解しながら、市政の課題解決へ向けて、資料と関連付けながら考えて説明する姿（ポイント１の評価規準の姿）を期待します。

全体での共有
（昨年度の実践より）



ポイント１

単元末では、学級の考えを提言としてまとめて市へ提出します。教師は、単元の生徒の姿（発言、記述、見方・考え方、取組方等）を見取り、想定した深い学びの具体的な姿が見られたかを評価します。

社会 ＜新潟地区／新潟市中教研＞

「３年地方自治」「２年中部地方」「１年アジア州」

研究推進責任者
新潟市立葛塚中学校
木村　　伸

教科・領域担当者
新潟市立宮浦中学校
山田　夏希

研究主題：「できる授業」「学びあう授業」
　　～「見方・考え方」を働かせる深い学びの実現～
開 催 日：11月９日（木）
会 場 校：新潟市立宮浦中学校
公　　開：３学級
授 業 者：１年　近藤　　拓
指 導 者：新潟薬科大学　教授　木村　哲郎 様
授 業 者：２年　江口　　太
指 導 者：新潟大学附属新潟中学校　校長　山本　達也 様
授 業 者：３年　山田　夏希
指 導 者：新潟市立山潟中学校　校長　笹川　　元 様

こんな深い学びの姿を目指します

単元構想や課題設定を工夫し、思考ツールやＩＣＴ機器を用いて自分の考えをまとめ、同じ考えをもつ生徒と共有する時間を設けることで、自信をもって発表し、意見を交換することができるようになり、課題に対して多面的・多角的に考察することができる姿を目指します。

深い学びにいたるポイント

ポイント１　単元構想・課題設定の工夫

既習知識とのギャップを生み出すことで、単元をつらぬく課題を設定します。生徒が主体的に課題解決にせまるために、身近な地域の課題を教材化したり、新潟市の産業を取り上げたりすることで学習課題を自分事としてとらえ、課題解決への意欲を高められるように工夫します。

ポイント２　議論の可視化

単元を通して思考ツールを用いることで、自分の考えをまとめ、根拠をもって話し合うことができます。

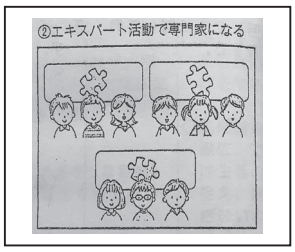
ポイント３　ＩＣＴの活用

ロイロノートを活用し、さまざまな資料の読み取りや授業の振り返りを共有することで多面的・多角的な視野にたって考察することができます。

単元（題材）の様子

※昨年度の新潟市立小針中学校の実践より

ポイント１　単元構想の・課題設定の工夫



①「関東地方」の学習を「なぜ東京大都市圏に人口が集中するのか。」という課題の解決を中心に据えて、単元を構想します。

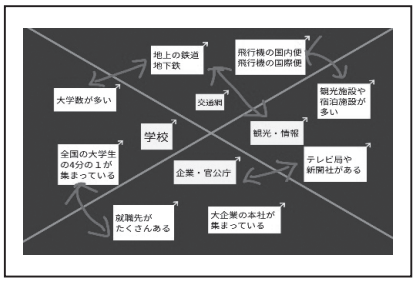
②ジグソー学習を取り入れ、全員で授業を作り、生徒全員が「できる授業」を目指します。

③エキスパート学習で、各自の役割を明確にし、主体的に取り組めるよう工夫します。

④それぞれが違う視点で調べることで、対話を通じて課題を解決できるようにします。

ポイント２　議論の可視化

⑤各自がエキスパート学習で得た情報を発表し、班の書記がＸチャートにまとめます。完成したＸチャートを元に班としての課題の答えを文章にします。



⑥Ｘチャートを見ると他の生徒が調べた視点と自分が調べた視点の関係性が見えてきます。課題について、多面的・多角的に考察でき、より深い学びに至ります。

ポイント３　ＩＣＴの活用

⑦インターネットで調べた内容をロイロノートにまとめて、班での説明に使用します。

⑧班としての課題の答えをロイロノートの提出箱に提出させます。それをクラスで共有することで、各自、さらに多角的な視野に立って思考することができます。

研究会

３つの学年を公開します。各分野で単元を通した課題設定を工夫することで、課題を自分事としてとらえることができるようにします。思考ツールやICTを活用し、多面的・多角的に考察し、他者との関わりの中で自分の考えを深め、それを自分の言葉で表現できる生徒を目指します。

社会 ＜下越地区／新発田市中教研＞

「1年：アフリカ州」

研究推進責任者
新発田市立第一中学校
海老名　崇

教科・領域担当者
新発田市立本丸中学校
横井　佑来

研究主題：社会との関わりを意識して
課題を追究・解決する生徒の育成
～深める問いで深い学びを～
開 催 日：11月7日（火）
会 場 校：新発田市立本丸中学校
公　　開：1学級
授 業 者：1年　横井　佑来
指 導 者：小千谷市立小千谷中学校　校長　若林　靖人 様

こんな深い学びの姿を目指します

「社会との関わりを意識する」ことを中核に授業を構想し、そこから生ずる課題を追究・解決する生徒の育成を目指します。さらに、課題を追究・解決する過程で設定する対話が、意見（考え）の発表に終止することなく、目指す深い学びの姿へと向かうよう、対話に「深める問い」を設定します。対話の際に「深める問い」を投げ掛けることで社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念を獲得する深い学びの姿が見られることを目指します。

深い学びにいたるポイント

ポイント1　社会との関わりを意識させるために教材化、資料提示を工夫する。

社会的事象の特色や相互関連、意味を考え、社会との関わりを意識しながら課題を追究・解決するにはどのような視点が単元のどの段階で必要になるかを考える必要があります。そのために教材化や資料提示の内容、加工、提示の仕方を工夫します。

ポイント2　社会との関わりを意識させるために問いの構成を工夫する。

「深める問い」を表出するためには学習課題と毎時の課題における問いがどのようにつながり社会への関わり方の選択・判断につながっているかなど、単元を通した問いの構成を工夫して、生徒が社会的事象の見方・考え方を働かせるように授業設計します。

ポイント3　「深める問い」を設定する。

「深める問い」は対話を「深い学び」に誘うために、「対話の途中で生徒に共通して立ち上がる本質的な問い」を意味します。「深める問い」には「そもそも●●とは何か？」〈定義（本質）を見いだす問い〉「それって、いつも○○なのか？」〈汎用性を見いだす問い〉

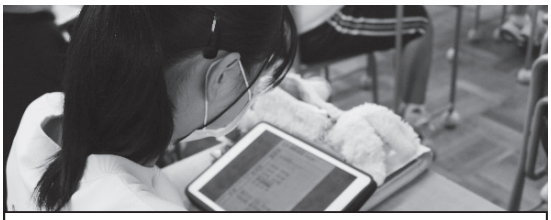
「▲▲と△△はどんな関係にあるのか？」〈関係を見いだす問い〉などが考えられます。具体的・特殊的・個別的な概念を獲得した生徒が、このような「深める問い」をもち、社会科の見方・考え方を働かせて抽象的・一般的・普遍的な概念を獲得していく姿が深い学びの姿であると捉えます。

単元（題材）の様子

①②　社会との関わりを意識させ、自分事として課題を追求・解決させるために身近な地域素材を教材化したり、資料の内容を精選、加工し、ＩＣＴを活用して提示します。例えばアフリカ州のカカオ豆の生産農家の様子と日本で製品化されたチョコレートの関係を教材化することでモノカルチャー経済の課題を自分事として考えさせたり、フェアトレードのあり方を検討させます。また資料を提示する際は何を読み取らせるのかを明確にするため、ICTで必要な部分を拡大したり、加工することで焦点化を図ることができます。

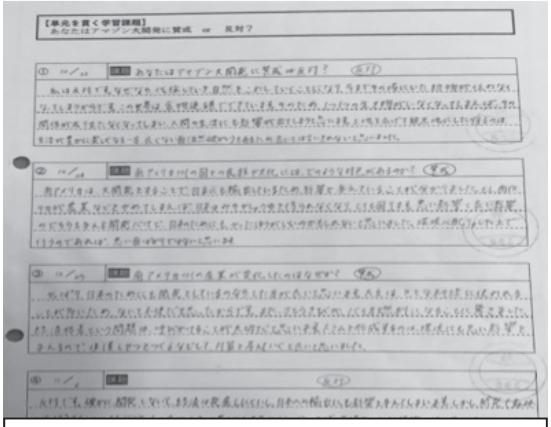
ポイント１

①身近な地域素材を教材化する。


②ICTで資料を精選して提示する。

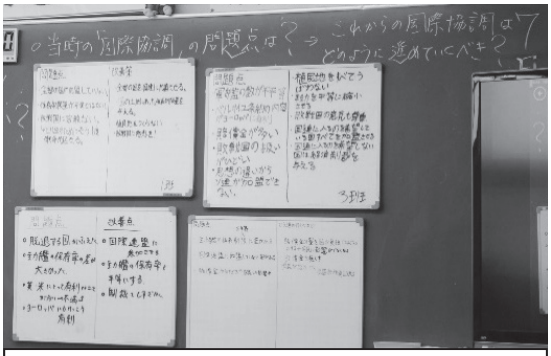
③　社会との関わりを意識させるためには単元の目標を見据えながら単元を貫く課題を設定することに加え、生徒の振り返りを活用しながら、毎時間の問い（学習課題や学習問題）の構成を工夫します。そのために毎時間の振り返りカードを用意し、生徒の疑問や問題意識を拾い上げ、単元の目標と結び付けるような問いを生徒と共に設定していきます。そうすることで生徒はよりその問いを自分事として捉え、課題を追求・解決します。

ポイント２


③生徒の振り返りから問いを構成する。

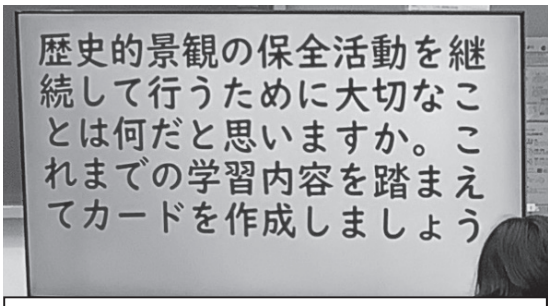
④⑤　問いについて班で話し合った結果を全体で共有した後、更に社会科の見方・考え方を働かせる「深める問い」を設定します。授業者が生徒の思考を読み取り、「深める問い」を、適切な場面で投げかけることによって、対話はより「深い学び」へと向かいます。また深める問いには定義（本質）を見いだす問い、汎用性を見いだす問い、関係性を見いだす問いなどがあり、抽象的・一般的・普遍的な概念を獲得していく姿が深い学びの姿であると捉えられます。

ポイント３


④話し合いの結果を全体で共有する。

研究会

１年生の地理的分野の世界の諸地域「アフリカ州」で授業を予定しています。豊かな資源と先進国からの開発援助を受けながらも、アフリカで暮らす多くの人々の暮らしが豊かにならないのはなぜなのか。またどうしたら豊かになるのかなどの課題を追求・解決する授業を予定しています。



⑤深める問いを設定する。